

教示場面における姿勢刺激図の作成と 姿勢刺激図に含まれる意味次元構造の検討

野中陽一朗・沖林 洋平¹⁾・井上 弥・石井 眞治

(2009年2月13日受理)

Construction of postural stimulation figures in instructional situation and An Examination of the dimensional structure of postural stimulation figures

Youichiro NONAKA, Youhei OKIBAYASHI, Wataru INOUE and Shinji ISHII

The purpose of this paper is to construct the postural stimulation figures in instructional situation, and determine the dimensional structure of the semantic space in which postural stimulation figures are showed; that is, to explore the nature, number and independence of the dimensions involved. And we investigated sex differences. Main findings were as followed. 1. We constructed five postural stimulation figures in instructional situation. 2. A principal factor analysis yielded evidence for three independent dimensions. Each of these factors was nominated as “status”, “stiffen”, and “affection”. 3. Sex differences were not seen in the whole postural stimulation figures in instructional situation. 4. Sex differences were seen in the particular postural stimulation figures except for “affection”.

Key words: Postural stimulation figures, dimensional structure, sex difference

キーワード: 姿勢刺激図, 意味次元構造, 性差

問題と目的

本研究の目的は、現実の教示場面で教師がとりえることが可能な姿勢刺激図を作成し、作成した姿勢刺激図に含まれている意味次元の数、性質、その独立性を明確にすること、および姿勢刺激図の解説に受け手の性要因が及ぼす影響を検証するところにある。

日常生活で行うコミュニケーションにおいて、我々は姿勢、表情、視線などの非言語的な側面から他者の感情状態や意図などを知ることができる。Wiener & Mehrabian (1968) は人の信憑性や魅力、あるいは地位といった特性が言語的コミュニケーションよりも非言語的コミュニケーションを通して伝達されると指摘している。近年、教育場面での非言語的コミュニケーションは、教師・生徒間におけるコミュニケーションを円滑にする上で効果的な手段と考えられており(長峰, 2001), McCroskey, Richmond, & McCroskey (2006)

は効率的な指導が教師の適切な非言語的コミュニケーションに基づくものであると指摘している。このため、教育場面における教師・生徒間の非言語的コミュニケーションに関する研究が勢力的になされるようになった。

姿勢は、非言語的コミュニケーションの中でも対人態度を伝達する重要な手段であり、情動状態やパーソナリティと結びついていることも指摘されている (Argyle, 1988)。また、送り手の印象を評価する際の重要な手がかりとなることが明らかにされている (Bond・白石, 1973; McGinley, LeFevre, & McGinley, 1975)。そのため、印象形成に意を払う臨床場面においてカウンセラーの姿勢は、非言語的コミュニケーションの中でも特に重要視されている(菅野, 1987; 上地, 1990)。また、神田橋 (1995) はクライエントの気持ちを理解するためにはクライエントのとっていた姿勢をとってみることが重要としている。このように姿勢に関する研究は

1) 山口大学教育学部

共通して姿勢のもつ対人的態度や感情表出の手がかりの機能を指摘している。

Mehrabian (1972) は姿勢が他者にメッセージを伝達する際にどのような基本的次元をもっているのかを説明している。そこでは、姿勢の基本的次元は、対人評価を意味する直接性と対人関係における地位序列の手がかりを示す弛緩の2つの意味次元から構成されるとしている。しかし、工藤・西川 (1984) は、Mehrabian (1972) が姿勢を除く他の非言語的行動の意味次元を直接性、地位、反応性の3次元で説明していることを受けて、姿勢に含まれている意味次元や性質そしてその独立性を明確にしようと研究を行った。その結果、姿勢の意味次元も相互に独立した3つの因子から構成されることを見出し、顔面表情判断などで見いだされた諸次元と密接に対応していることを示した。このように研究者によって、姿勢が伝達する次元に若干の違いはあると考えられるが、他者の姿勢から我々はさまざまな情報を獲得していることが分かる。つまり、姿勢は非言語的コミュニケーションの中でも重要な位置づけであることが示されている。

教師・生徒間における非言語的コミュニケーションの中でも、酒井・吉川 (1984) は教師の留意すべき点として姿勢の重要性に触れ、教師は熱意や誠意を示すために前傾姿勢で視線を児童に向ける、姿勢を堂々とすべきことを提唱している。そして、教授場面においても姿勢の重要性が検証されており、Neill (1989) はスライドを用いた実験により、教師が腰に手をあてて立つと顔が微笑んでいても生徒から不機嫌で親しみやすくないと評定される傾向があることを示した。また、熱心な教師は前傾姿勢をとり、生徒は前傾姿勢をポジティブなシグナルと評定する傾向があることも示されている (Neill, 1991)。一方、Neill (1989) は姿勢から教師の自信のなさや不安の高さを生徒が正確に読み取り、その結果、授業をなまけたり、授業を妨害したりといった教師への挑戦的な態度をとることに関係するという指摘をしている。このように教授場面での教師の姿勢は生徒に重要な影響を及ぼすことが示されているにも関わらず、教授場面における教師の姿勢に関する体系的な研究は不足している。

近年頻繁になされている教師・生徒間での非言語的コミュニケーションの研究において、直接性¹という教師による非言語的行動の伝達機能に焦点が置かれている。教師によりなされる非言語的行動が生徒に伝達する直接性の研究結果から、教師の非言語的直接性は教授場面で生徒に重要な影響を及ぼすことが明らかにされてきた (McCroskey, Richmond, Saliinen, Fayer, & Barraclough, 1995; McCroskey, Saliinen, Fayer,

Richmond, & Barraclough, 1996)。

しかし、この一連の教師の非言語的直接的性における研究には4つの問題点を指摘することができる。1点目は、直接性は教師の非言語的行動による様々なチャンネルを複合し生徒に及ぼす影響を検証しているため、教師による単一の非言語的行動が生徒にどのような影響を及ぼすのかが検証されていないことである。2点目は、教師の非言語的直接的性における研究の大部分が、教師の非言語的直接的性が生徒に及ぼす影響の測定を質問紙調査に基づいて行っており、研究結果は生徒の質問紙上の回答と関連研究に基づいたものであるため生徒に影響を及ぼす教師による非言語的行動の規定要因の妥当性が高く因果関係が明確な研究成果ではないことである。そのため、上記の問題点を解明するためには規定要因の妥当性が高く因果関係が明白な断片的なフィルムクリップにより作成され教師の非言語的行動が教師に対する生徒の印象評定を検証した研究 (例えば、Ambady & Rosenthal, 1993) のように、因果関係が妥当で明確な非言語的行動による刺激材料を用いて教師の非言語的行動が生徒に及ぼす影響を検証する必要が考えられる。3点目は、文脈設定の欠如である。非言語的行動の意味は、文脈によって規定されることが指摘されている (深田, 2004)。Patterson (2006) は平行プロセス・モデルを提唱し、その中で文脈要因を社会的環境要因と位置づけた上で会話相手と状況という2つの変数により構成されると指摘している。教授過程は教師・生徒間におけるコミュニケーション過程として捉えることができ、この過程には教師が生徒に行う教示やフィードバックがあるとされている (坂元, 1981)。教授コミュニケーションの中でも教師による教示場面は重要視されている。そのため、教師が生徒に教示を行う教示場面という文脈要因を明確に規定して非言語的行動が及ぼす影響を検証する必要がある。4点目は、非言語的行動が及ぼす影響に受け手の性要因が考慮されていないことである。従来、女性は男性よりも視覚的な非言語的手がかりの解読スキルにおいて優れていることが指摘されてきた (Hall, 1984)。一方、Hall (2006) は解読において性差が見られなかった非言語的行動の存在も指摘している。そのため、受け手側の性要因は非言語的行動が及ぼす影響にどのような差異をもたらすのかが検証する必要がある。

そこで、本研究の目的は教授場面において生徒に重要な影響を及ぼすと考えられる教師の姿勢に関する体系的な研究が不足していることから特に、以下の3つ

¹ 人々の間で知覚された身体的あるいは心理的親密性の程度 (Mehrabian, 1981)。

の問題点を解明するところにある。1点目は、生徒に影響を及ぼすと考えられる姿勢の要素を踏まえて現実の教示場面において教師がとりえることが可能な姿勢刺激図を作成することである。2点目は、文脈を明確にした上で作成した姿勢刺激図に含まれている意味次元の数、性質、その独立性を明らかにすることである。そして、3点目は受け手の性要因が姿勢刺激図の解読に及ぼす影響を検討することである。

実験 1

目的

生徒に影響を及ぼすと考えられる姿勢の要素を踏まえて現実の教示場面において教師がとりえることが可能な姿勢刺激図を作成する。

方法

評定者 大学院生 20名² (男女各 10名, 平均年齢 22歳 8ヶ月)。

刺激材料 先行研究 (Bull, 1978; 工藤・西川, 1984; 中村・松尾・畑山, 1994; Neill, 1991) から他者に影響を及ぼす姿勢を構成するのに有効な要素をリストアップし、姿勢刺激図を作成した。

具体的には、他者に影響を及ぼす姿勢を形成するのに重要な要素とされる「腕や手の位置」、「体の傾き」、「頭の傾き」の3要素の状態に注目し、「腕や手の位置 (体の前で両手をつかむ, 両手を腰に当てる, 体の後ろで両手をつかむ, 胸の前で両腕を組む, 机に両手をもたれてつかむ)」、「体の傾き (前傾・後傾)」と「頭の傾き (真正面・下向き)」の5×2×2の20姿勢パターンの刺激材料を教授場面に従事する教師の服装に該当する上下スーツを着た男性被験体と女性被験体によってそれぞれ作成した³。作成した総計40姿勢パターンを、デジタル一眼レフである Canon EOS D30 を用いて撮影した。その後、40姿勢パターンの画像をパソコン SONY PCG-FR55/B に取り込み、姿勢パターンごとに適切に撮影されているものを刺激材料として採択した。

文脈設定 本研究は、教師・生徒間における教授コミュニケーションという枠組みで刺激材料を作成する。そのため、Patterson (2006) のモデルに基づき坂元 (1981) の教師が生徒に行う教示の重要性を踏まえ、教授コミ

² 評定者である大学院生は全員が教育学研究科に所属している者であった。

³ 男性と女性の両者の刺激材料を作成することは、姿勢の符号化および解読化に性差が示されている (Hall, 2006) ためである。

ュニケーションの始まる教師が生徒に教示を行う場面という文脈設定を行った。

予備調査手続き 男性被験体および女性被験体による各20姿勢パターンの刺激材料が教授コミュニケーションにおける教示の際にその姿勢を教師がとりえるかどうかを、個別に2者択一で評定させた。

結果と考察

男性評定者のみ、女性評定者のみ、男女両評定者の3側面からなる2項検定の結果、男性被験体および女性被験体の両方の姿勢パターンにおいて共通して2者択一評定により現実の教示場面で教師がとりえると選択した人が有意に多かった ($p < .01$) 刺激材料である5つの姿勢パターン (以下、姿勢1, 姿勢2, 姿勢3, 姿勢4, 姿勢5) を本研究で用いる姿勢刺激図と定めた (Table 1)。

そのため、これら5つの姿勢刺激図は教授コミュニケーションにおける現実の教示場面において教師に使用されることが可能なものと考えられることができる。実験1の結果、実際に現実の教示場面に教師がとりえる姿勢かどうかは頭の向き要因に顕著な特徴がみられた。つまり、他者に対して何らかの教示を行う際に教師は下を向くのではなく正面を見る必要がある条件として考えられていることが示唆された。一方、2項検定の結果、男性被験体による姿勢パターンは女性被験体による姿勢パターンよりも現実の教示場面でとりえると有意に評定されたものが多かったことが示された。このことは、Hall (2006) の指摘したように男性は女性よりも自由に姿勢を表出することができるとしたことに起因するものと考えられる。

以上のように、実験1では男性被験体と女性被験体によって現実の教示場面に教師がとりえることが可能な姿勢刺激図に差異がみられることがわかった。次に、実験2では、作成した姿勢刺激図の解読を行う際に、文脈設定により人物の地位や性別を規定した上での姿勢刺激図の解読を行った際の意味次元の数、性質、その独立性を明らかにし、そして受け手の性要因が及ぼす影響を検証する。

Table 1 5つの姿勢刺激図の特性

| | 姿勢1 | 姿勢2 | 姿勢3 | 姿勢4 | 姿勢5 |
|------------|--------------------|-------------------|-------------------------|-------------------------|--------------------------|
| 腕・手 要因 | 体の前で 両手をつ かむ | 体の後ろ 腰に当 てる | 体の後ろ で両手 をつか む | 体の後ろ で両手 をつか む | 机に両手 をもた れてつか む |
| 体の傾 き要因 | 前傾 | 後傾 | 前傾 | 後傾 | 前傾 |
| 頭の向 き要因 | 真正面 | 真正面 | 真正面 | 真正面 | 真正面 |

実験2

目的

実験1で作成した5つの姿勢刺激図を用いて、実験参加者が男性教示者の姿勢刺激図の解説を行った際の意味次元の数、性質、その独立性を検討すること、並びに姿勢刺激図の意味次元の解説に及ぼす受け手の性要因の影響を検討するところにある。

方法

実験参加者 実験参加者は、133名（男性60名、女性73名、平均年齢20歳3ヶ月）であった。

姿勢刺激図 実験1で作成した現実の教示場面に教師がとりえることが可能な姿勢刺激を用いた。なお、本研究では人物の性の要因を規定するといったより現実の教示場面に沿った形での検討に主眼を置くため、被験体による姿勢刺激図の性を統一する必要があった。そのため、本研究では男性被験体によって作成された姿勢刺激図を用いた。

測定内容 男性被験体による姿勢刺激図の意味次元の数並びに性質を測る指標として、Bull (1978) や工藤・西川 (1984) により姿勢が伝達する印象を測定するのに用いられた尺度、姿勢が形成する人物印象を測定するという視点で林 (1978) の特性形容詞尺度を参考に尺度を作成した。この林 (1978) の尺度は、対人認知の個人差を測定する目的で開発されているが、その目的以外にも幅広く印象評定の尺度として用いられている。そのため、本姿勢印象測定尺度は5段階からなる計27個の形容詞対で構成された。

手続き 実験参加者は集団場面で測定内容を含んだ

調査用紙が与えられ、集団一斉方式に基づき実験が行われた。まず、男性を被験体とした5つの姿勢刺激図を順番にプロジェクターから大型スクリーン上に映し出した。実験参加者は、各姿勢刺激図を見ながら姿勢印象測定尺度に回答した。その作業を5つの姿勢刺激図全てに対して行った。なお、カウンターバランスを行うために全体の実験を通して、各姿勢刺激図の呈示順序とその際の実験参加者の人数が同等になるように設定した。また、本研究は文脈や人物の地位を考慮し現実の教師による教示場面に沿う形式で検討を行うため、実験の教示の際に、映し出される姿勢刺激図が教授過程における教示の際に男性教師がとった姿勢ということの説明し文脈の設定を行った。

結果

男性被験体による姿勢刺激図の意味次元の検討 男性被験体による姿勢刺激図の意味次元の数並びに性質を検討するために、姿勢印象測定尺度の構造を明らかにする必要があった。そのため、以下の手続きにより姿勢印象測定尺度の因子分析を行った。まず、各実験参加者の5つの姿勢刺激図に対する形容詞対尺度評定値 (5×27×133) の3次元データを2次元データに修正した。その上で、その形容詞対尺度評定値 (27×665) を算出し、主因子法により因子を抽出した。なお、因子数は、固有値1以上の基準を設け、さらに固有値の減衰状況や因子の解釈可能性も考慮して、3因子とした。バリマックス回転によって単純構造化を行った結果、各因子の下位次元となりえる可能性を考慮し、因子負荷量が0.3以下の項目を除外し、再度因子分析を行った。最終的に残った項目とその結果を表

Table 2 男性教示者における姿勢印象測定尺度因子分析結果

| 形容詞対項目内容 | 因子I | 因子II | 因子III | 共通性 | 信頼性 |
|----------------------|-------|-------|-------|------|-------|
| 因子I (8項目) | | | | | |
| 15 消極的な-積極的な | 0.83 | -0.27 | -0.15 | 0.78 | α=.91 |
| 5 落胆している-張りきっている | 0.76 | -0.06 | -0.12 | 0.60 | |
| 19 卑屈な-堂々とした | 0.76 | -0.33 | -0.28 | 0.76 | |
| 21 無気力な-意欲的な | 0.74 | 0.05 | 0.07 | 0.56 | |
| 18 臆病な-勇敢な | 0.72 | -0.35 | -0.27 | 0.72 | |
| 27 頼りにならない-頼もしい | 0.71 | -0.18 | 0.10 | 0.55 | |
| 13 暗い-明るい | 0.63 | -0.36 | 0.16 | 0.54 | |
| 23 退屈した-興味のある | 0.61 | 0.00 | 0.31 | 0.46 | |
| 因子II (3項目) | | | | | |
| 10 開放的である-身構えている | -0.10 | 0.82 | -0.09 | 0.70 | α=.81 |
| 1 くつろいでいる-緊張している | -0.09 | 0.79 | 0.07 | 0.63 | |
| 6 安心している-おそれている | -0.35 | 0.66 | 0.04 | 0.55 | |
| 因子III (4項目) | | | | | |
| 17 不親切な-親切な | 0.07 | 0.20 | 0.74 | 0.59 | α=.71 |
| 8 敵意をもっている-親しみをもっている | -0.09 | -0.13 | 0.66 | 0.46 | |
| 12 冷たい-暖かい | 0.28 | -0.16 | 0.56 | 0.42 | |
| 11 怒っている-冷静である | -0.22 | 0.10 | 0.56 | 0.37 | |
| 因子寄与 | 4.47 | 2.28 | 1.95 | 8.70 | |
| 累積寄与率 | 29.81 | 45.03 | 58.00 | | |

にしたものが、Table 2である。

第I因子は、「消極的な一積極的な」、「落胆している一張り切っている」、「卑屈な一堂々とした」などの項目で因子負荷量が高く、他者に対する支配性のような対人態度を伝達する因子であると考えられた。そこで、第I因子を「地位性」因子と命名した。第II因子は、「開放的である一身構えている」、「くつろいでいる一緊張している」などの項目で因子負荷量が高く、他者に対する自身の緊張といった情動状態を伝達する因子であると考えられた。そこで、第II因子を「硬直性」因子と命名した。第III因子は、「不親切な一親切的な」、「敵意をもっている一好意をもっている」などの項目で因子負荷量が高く、他者を意識し、深く関与するか否かを伝達する因子であると考えられた。そこで、「好意性」因子と命名した。

次に、3つの下位尺度の信頼性の検討を行うために、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、第I因子の「地位性」因子は $\alpha = .91$ 、第II因子の「硬直性」因子は $\alpha = .81$ 、第III因子の「好意性」因子は $\alpha = .71$ であった。従って、内的整合性が高く、3つの下位尺度の信頼性が確認された。姿勢印象測定尺度が3つの下位次元から構成されることから、男性被験体による姿勢刺激図の意味次元の数は3つでありそれぞれに独立で明確な性質を持つことが示された。

姿勢刺激図の意味次元解釈における男女差の比較
因子分析により得られた姿勢刺激図の意味次元を構成する3因子独立に男女の印象測定解説得点の差をTable 3に示した。それぞれの次元に関してt検定を行った結果、各次元において性差は見られなかった。

各姿勢刺激図における男女の印象測定の比較
因子分析により得られた姿勢刺激図の意味次元を構成する

3因子独立に男性と女性の各姿勢刺激図における印象測定得点の差異を示したのがTable 4である。その結果、姿勢刺激図1の地位性に関しては、性差がみられ($t(131)=2.093, p<.05$)、男性の方が姿勢刺激図1から地位の高さを感じていた。また、姿勢刺激図3の地位性と硬直性に関しても、それぞれ有意傾向がみられ($t(131)=1.920, p<.10$)、($t(131)=1.816, p<.10$)、女性の方が姿勢刺激図3から地位の高さを感じていた、また姿勢刺激図3から女性の方が硬直性をより感じていた。そして、姿勢刺激図4の地位性と硬直性に関しても、それぞれ有意傾向並びに有意差がみられ($t(131)=1.828, p<.1$)、($t(131)=2.354, p<.05$)、男性の方が姿勢刺激図4から地位の高さを感じていた、さらに姿勢刺激図4から男性の方が硬直性をより感じていた。

考察

姿勢刺激図の意味次元構造に関する考察
姿勢印象測定の結果、実験参加者は、教示場面における男性被験体による姿勢刺激図の印象を特定する際、3つの側面から印象を形成していることが明らかとなった。つまり、「地位性」、「硬直性」、「好意性」という3つの側面であった。このことは、工藤・西川(1984)が姿勢語を用いて姿勢の意味次元を検討した際に、姿勢の意味次元が「対人意識性」、「自己充実性」、「対人好意性」という3因子から成り立っていることと因子名の違いはあれ同義と考えることができた。つまり、教師が生徒に対する教示を行う際にとりえる姿勢に関しては、教師が姿勢という手がかりを通して生徒に対人態度を伝達する際に、生徒は3つの側面を認知し、その認知過程を媒介として印象を形成していることが示唆された。

次にこのことを踏まえ、各因子について考察する。まず、「地位性」は、他者に対する支配性のような対人態度を伝達する因子であった。そのため、実験参加者は姿勢刺激図から教師の地位を判断していることがうかがえる。このことは、深田(2004)が姿勢というチャンネルは対人場面で地位伝達を行うという指摘に合致しているものと考えられる。一方、「硬直性」は、他者に対する自身の緊張といった情動状態を伝達する因子であった。つまり、実験参加者は姿勢刺激図から、

Table 3 姿勢刺激図の印象測定における男女差の比較

| | | 男性 | 女性 | t-test | |
|-----|----|------|------|--------|------|
| 地位性 | M | 3.29 | 3.25 | .832 | n.s. |
| | SD | 0.65 | 0.61 | | |
| 硬直性 | M | 2.81 | 2.79 | .283 | n.s. |
| | SD | 0.88 | 0.78 | | |
| 好意性 | M | 2.98 | 2.93 | 1.143 | n.s. |
| | SD | 0.58 | 0.54 | | |

Table 4 各姿勢刺激図の印象測定における男女差の比較

| | | 姿勢1 | | | 姿勢2 | | | 姿勢3 | | | 姿勢4 | | | 姿勢5 | | |
|-----|----|------|------|-----------|------|------|------------|------|------|-----------|------|------|-----------|------|------|-----------|
| | | 男性 | 女性 | t-test | 男性 | 女性 | t-test | 男性 | 女性 | t-test | 男性 | 女性 | t-test | 男性 | 女性 | t-test |
| 地位性 | M | 2.70 | 2.57 | 2.093 ** | 3.97 | 3.91 | 1.303 n.s. | 2.61 | 2.73 | 1.920 * | 3.56 | 3.43 | 1.828 * | 3.60 | 3.59 | .111 n.s. |
| | SD | 0.39 | 0.31 | | 0.27 | 0.27 | | 0.38 | 0.32 | | 0.42 | 0.37 | | 0.39 | 0.33 | |
| 硬直性 | M | 1.83 | 1.91 | .995 n.s. | 3.43 | 3.29 | 1.505 n.s. | 2.52 | 2.74 | 1.816 * | 2.75 | 2.50 | 2.354 ** | 3.51 | 3.51 | .004 n.s. |
| | SD | 0.53 | 0.40 | | 0.55 | 0.51 | | 0.74 | 0.64 | | 0.68 | 0.54 | | 0.64 | 0.54 | |
| 好意性 | M | 3.15 | 3.10 | .639 n.s. | 2.83 | 2.72 | 1.170 n.s. | 3.12 | 3.10 | .250 n.s. | 2.94 | 2.93 | .211 n.s. | 2.87 | 2.83 | .356 n.s. |
| | SD | 0.51 | 0.42 | | 0.59 | 0.53 | | 0.45 | 0.52 | | 0.36 | 0.41 | | 0.81 | 0.67 | |

**p<.05 *p<.10

教師の緊張や身構えているといったことを判断していることが示唆される。このことは、Neill (1989) が姿勢から教師の自信のなさや不安の高さを正確に読み取ると、授業をなまけたり、授業を妨害したりといった教師への挑戦的な態度をとるようになることを指摘していることと関係している。つまり、生徒が教師を判断する際に、「硬直性」という情動状態は重要な観点であることが分かる。そして、「好意性」は、他者に対する好意を伝達する因子であった。つまり、実験参加者は姿勢刺激図から、自分に対してどの程度好意を持って関与しているかを判断していることになる。この因子は、期待の伝達機能に関連している。蘭・内田 (1995) は教師期待効果に基づき、非言語的行動を通じた好意的な態度を認知することが媒介的に作用し学習成績に影響を及ぼしている旨を指摘している。このため、教師期待効果による好意的な態度は、「好意性」という因子と合致すると判断できる。

そのため、生徒が教師を判断する際に、姿勢が伝達し認知される「好意性」という指導者の対人的態度も重要な観点であることが分かる。

姿勢刺激図における男女の印象測定と比較に関する考察 本研究で用いた姿勢刺激図を総体的に集めて印象を測定すると各因子の印象得点に対する男女の解読に差はみられなかった。このことは教師の姿勢という手がかりから生徒は姿勢が伝達する3つの次元を性差に関わらず認知していることになり、教師の姿勢は受け手の性差を問わず重要な非言語的行動であることが示唆された。

しかし、姿勢刺激図を個別に検討していくと興味深いことが明らかとなった。つまり、男女間で印象測定の各因子の得点に関して性差が、姿勢刺激図1、姿勢刺激図3、姿勢刺激図4においてみられたのである。加えて、姿勢の各意味次元に言及するならば、「地位性」及び「硬直性」には性要因の差がみられるにもかかわらず、好意性にはこのような性要因の差がみられなかった。そのため、地位性や硬直性のような Mehrabian (1972) の指摘する弛緩といった次元に関連するような性質を伴う意味次元の解読において性要因が及ぼす影響が示唆された。

従来、女性は男性よりも視覚的な非言語的手がかりの解読スキルにおいて優れていることが明らかにされてきた (Hall, 1984; Briton & Hall, 1995)。同様に、非言語的手がかりの解読スキルと関連が指摘されている非言語的手がかりに関する知識も女性の方が男性よりも有意に多かったことが認められている (Rosip & Hall, 2004)。しかし、本研究の結果に基づけば、男性被験体により作成された教示場面での姿勢刺激図とい

った総体的な姿勢という手がかり解読においては性差がみられない領域であることが示唆された。つまり、総体的な現実の教示場面における教師がとりえる姿勢刺激図の意味次元の解読は Hall (2006) が示した性差がみられない領域であると考えられる。

一方、姿勢を構成する要素を変容させた各姿勢刺激図に対する印象得点において「地位性」や「硬直性」といった次元に関しては性差がみられた。加えて、女性が男性よりも解読スキルが優れているという従来の研究結果に対して、姿勢によっては男性がより「地位性」や「硬直性」といった次元を女性よりも高く認知していることが明らかにされた。そのため、多様な教授コミュニケーション場面における姿勢刺激図の解読において、送り手側の性要因および受けて側の性要因を踏まえた上で、今後は性要因が姿勢刺激図の解読に及ぼす影響をより検証する必要性が考えられた。

引用文献

- Ambady, N., & Rosenthal, R. (1993). Half a minute: Predicting teacher evaluations from this slices of nonverbal behavior and physical attractiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, *64*, 431-441.
- 蘭 千寿・内田 淳 (1995). 学習意欲に及ぼす教師期待の効果-教師の非言語的行動の分析. 防衛大学校紀要人文科学分冊, *71*, 1-13.
- Babad, E. (2005). Nonverbal behavior in education. In Scherer, K.R., Harrigan, J.A. & Rosenthal, R. (Ed.), *The new handbook of methods in nonverbal behavior research*. New York, NY, US: Oxford University Press, pp.283-311.
- Babad, E. (2007). Teacher's Nonverbal Behavior and its Effects on Students. In Perry, R.P. & Smart, J.C (Ed.), *The Scholarship of Teaching and Learning in Higher Education: An Evidence-Based Perspective*. Springer, pp. 201-262.
- Bond, M. & 白石大介 (1973). 面接者の「姿勢」と「地位」が被面接者に及ぼす影響—non-verbal communicationの研究— 実験社会心理学研究, *13*, 11-21.
- Bull, P. (1978). The interpretation of posture through an alternative methodology to role play. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, *17*, 1-6.
- 深田博己 (2004). インターパーソナル・コミュニケーション—対人コミュニケーションの心理学—
- Hall, J.A. (1984). Nonverbal sex differences: Communication accuracy and expressive style.

- Baltimore, MD: The Johns Hopkins University Press.
- Hall, J.A. (2006). Women's and Men's Nonverbal Communication. Similarities, Differences, Stereotypes, and Origins. In Patterson, M.L. & Manusov, V. (Ed.), *The Sage handbook of nonverbal communication*. Thousand Oaks, CA, US: Sage Publications, Inc, pp. 201-218.
- 林 文俊 (1978). 容貌と性格の仮定された関連性. 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **25**, 233 - 247.
- 神田橋條治 (1995). 追補 精神科診断面接のコツ 岩崎学術出版社.
- 菅野 純 (1987). 心理臨床におけるコンバーバル・コミュニケーション 春木 豊 (編) 1987 心理臨床におけるノンバーバル・コミュニケーション 川島書房 II Pp45 - 94.
- 工藤 力・西川正之 (1984). 姿勢の意味次元構造の検討. 心理学研究, **55**, 36-42.
- McCroskey, J. Sallinen, A., Fayer, J., Richmond, V., & Barraclough, R. (1996). Nonverbal immediacy and cognitive learning: A cross-cultural investigation. *Communication Education*, **45**, 200-211.
- McCroskey, J., Richmond, V., Sallinen, A., Fayer, J., & Barraclough, R. (1995). A cross-cultural and multi-behavioral analysis of the relationship between nonverbal immediacy and teacher evaluation. *Communication Education*, **44**, 281-291.
- McCroskey, J., Richmond, V., & McCroskey, L. (2006). Nonverbal Communication in Instructional Contexts. In Patterson, M.L. & Manusov, V. (Ed.), *The Sage handbook of nonverbal communication*. Thousand Oaks, CA, US: Sage Publications, Inc, pp.421-436.
- McGinley, H., LeFevre, R., & McGinley, P. (1975). The influence of a communicator's body position on opinion change in others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 686-690.
- Mehrabian, A. (1972). *Nonverbal communication*. Chicago: Aldine Atherton, Inc.
- マレーピアン, A. (1986). 西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫 (共訳) 非言語的コミュニケーション 聖文社 (Mehrabian, A. (1981). *Silent Messages: Implicit Communication of Emotions and Attitudes*. California: Wadsworth Publishing Company.)
- 長峰伸治 (2001). パーソナリティの理解 速水敏彦・吉田俊和・伊藤康児 (編) 生きる力をつける教育心理学 ナカニシヤ出版 pp.223-235.
- 中村昭之・松尾典義・畑山恵美子 (1994). 心理臨床場面におけるノンバーバル行動—カウンセラーの姿勢がクライアントに与える影響について. 駒澤社会学研究, **26**, 129-140.
- Neill, S. (1989). The effects of facial expression and posture on children's reported responses to teacher nonverbal communication. *British Educational Research Journal*, **15**, 195-204.
- Neill, S. (1991). *Classroom nonverbal communication*. London: Routledge. (ネイル, S. 河野義章・和田 実 (訳) 教室における非言語的コミュニケーション 東京学芸図書.)
- Patterson, M.L. (2006). The Evolution of Theories of Interactive Behavior. In Patterson, M.L. & Manusov, V. (Ed.), *The Sage handbook of nonverbal communication*. Thousand Oaks, CA, US: Sage Publications, Inc, pp. 21-39.
- Richmond, V. & McCroskey, J. (2003). *Nonverbal Behavior in Interpersonal Relations* Allyn & Bacon. (リッチモンド, V. & マクロスキー, J. 山下耕二 (編訳) 2006 非言語行動の心理学—対人関係とコミュニケーション理解のために— 北大路書房.)
- Rospig, J.C. & Hall, J.A. (2004). Knowledge of nonverbal cues, gender, and nonverbal decoding accuracy. *Journal of Nonverbal Behavior*, **28**, 267-286.
- 坂元 昂 (1981). 教育工学の原理と方法 明治図書.
- 酒井 清・吉川成司 (1984). 非言語的情報の研究—教育過程の未開拓領域— 明星大学出版会.
- Steward, A.L & Lupfer, M. (1987). Touching as teaching: The effect of touch on students' perceptions and performance. *Journal of Applied Social Psychology*, **17**, 800-809.
- 上地安昭 (1990). 学校教師のカウンセリング基本訓練 北大路書房.
- Wiener, M. & Mehrabian, A. (1968). Language within language: Immediacy, a channel in verbal communication. *Appleton-Century-Crofts*.
- Witt, P., Wheelless, L., & Allen, M. (2004). A Meta-Analytical Review of the Relationship between Teacher Immediacy and Student Learning. *Communication Monographs*, **71**, 184-207.